

障害者福祉援助論

- これから現場に行くあなたに！ -

第5回

支援者との出会い

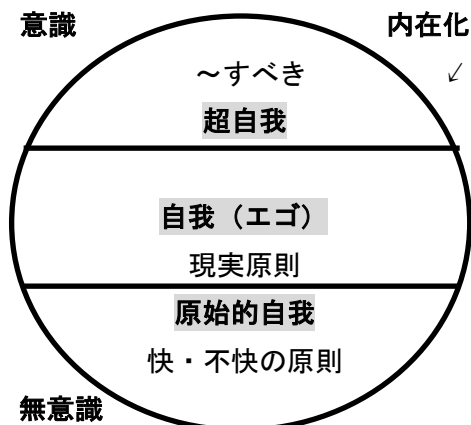
千葉 晃央

制度上は、もちろん利用者さんと支援者は、支援－被支援の関係です。それと同時に、人が人と出会っているという側面もあります。そして、人が人と出会ったとき、相手から何かしらの影響を受けるとされています。支援で試行されるのは、支援者から利用者さんへの、基本的には良質な影響です。より良い方向への可能性が広がるように願い、支援者は影響も意図して行動します。ではそれは、どんなメカニズムが想定されているのでしょうか。その一つを取り上げてみたいと思います。

信頼関係構築における一つの考え方

精神分析の創始者フロイトはこんな図で人の心を説明しました。フロイトの心の構造図（他にも言い方複数あり）といわれています。様々な図で説明されていますが、本格的な説明は臨床心理学の皆さんにお任せし、福祉領域において、どのように援用されているかという視点（私視点）について今回は話題にしたいと思います。

人間は生き物です。三大欲求といわれる根源的な欲求は私たちにも当然存在します。それは①睡眠欲、②食欲、③性欲といわれています。眠たくなるのは必然ですし、栄養を取らなければ肉体を維持できません。そして、種の継続や繁栄を志向するのは自然の摂理です。子孫を残そうとするのは生命が生まれて以来の法則ともいえるでしょう。そんな三大欲求を起点に人は突き動かされる。そんな衝動を持っているのではないか。この心の構造図の説明ではその衝動をつかさどるところとし



て原始的自我というところがあるとなりました。そして、その欲求が満たされれば「快」と感じますし、満たされなければ「不快」と感じる。そういう部分が人も原始以来持っているでしょう、と説明しました。人がその行動を行う、行わないを判断する基準として快か不快かで行動する。そんなふうにこの構造図では考えられてきました。

共同生活に必要な衝動

一方で人間が人間である所以は、理性や知恵など、思考をすることともいわれています。そんな活動から、人間が導き出すのは「〇〇に関してはこうすべし」「××に関してはこうあるべきである」といった価値観や規則性です。そういうことを大切にするとところが心にはあるよねとなりました。そ

の部分で「自ら」や「我」を超越したものとして「超自我」としました。そういう気持ちで人は動くこともあるよね、そしてそれが人たる所以とも言われたりします。赤信号では止まるべき、人をむやみに傷つけてはいけない…など人が共同して生活する上で必要ともいえます。そして、秩序のある平穏な暮らしを形成する上では欠かすことができないともいえます。

これら「原始的自我」「超自我」という2つの異なる原則をもつ、心の中にある部分。それら2つを調整する役割を持つところもあるのではないかと。それを「自我」と呼びました。自らとして、我として、今はどう行動するのか？を判断し、実行する。おなかですきました、でも授業中です。おにぎりをカバンから出して食べてはいけない。このように「食べるべきでない」と思い、超自我と原始的自我の調節をして、現実に即した行動をとれるように調整し、行動選択をしていく。その法則性を「現



実原則」といいました。

つまり、人は欲求がある。でもこれはこうした方がいいよねとも思う。それではこの場面ではどうしよう？と考えるべき行動を選択する。こうして、人は行動していると説明できるのではないかとしたのです（あくまで私の理解）。

後から取り入れる行動のレパートリー

では、人は生まれながらに、こんな機能を心に持っているのでしょうか。原始的自我はわかります。生き物ですから。しかし、超自我といわれるようなところはどこやって形成されるのでしょうか。

それは生まれて、周囲にいる人から学ぶといわれています。特に人生の初期は親（もしくは日常を監護しているもの）であることが多いです。ここでは「同一人物による無条件絶対の愛情」が必要ともいわれたりします。愛情がベースです。存在自体を根源的に肯定し、そんな人からもらっている「快」を伴う環境を失いたくないので、その人の指示に従おうとする。その人が大切にしている価値観や行動を自分も大切にします。そうすることで、またその「快」を伴う二者関係を継続することができます。親（や親役割機能をしてくれる人）は玄関で靴は揃えて脱ぎなさい！朝起きたらおはようといいなさい！といいます。それをはじめは言われたからする。結果として、それをしたら褒められる。その人にも認められるし、またその行動をしようとなる…。しかし、いずれそんなことを逐一思い出さなくなっていく。「これはこうした方がいい」と思うようになる。それが超自我になっていくのではないかとされています。

これは、その言ってくれていた人を自分の心に取り込んだ状況とも説明されてきました。それを「内在化」と呼びました。心の中で、その人と対話をしているとも説明できるでしょう。コントでは

心の中の天使と悪魔と対話する主人公が描かれることがありますがああ感じます。

「内在化」は幼いころは親や親役割の人から影響を受けて取り込まれますが、それが成長とともに先生になったり、先輩になったり、尊敬する人になったり、友人になったり。「自分もそういうことを大事にしよう」や「自分もあんなりたい」と思い、その行動を「まね」するところから始め、いつの間にかそれが当たり前になり、「これはこうでしょ」となっていく。そうしたメカニズムがあるだろうとしました。そして、このメカニズムは親子間だけではなく、支援者と被支援者との支援関係においても同じようなことが起こるとよいだろうとされてきました。

利用者さんが支援者と出会い、支援者さんからの絶対的愛情を甘受し、それを失いたくもないから、頑張ってみよう、いつもより頑張ってみよう。あの人がああいっているから騙されたと思ってやってみよう、あの人が言っているから顔も立てて、試しにやってみようか…も含めて作用しないかと考えました。

失いたくない関係

その前提には支援者からも絶対的愛情、肯定感、理解を被支援者は感じることができているのが前提です。福祉利用者のこれまでの歩みや努力を認め、これまでの頑張りも証明もしてくれる人であり、一緒にいたら元気になることもできるし、また会いたいとも思える…。そんな人に、そんな存在に支援者になることができれば、その出会いから相手も変化する可能性が生まれるのではないかと。

相手を一方的に操作したり、ハウツーでとらえたりするものではありません。人間的な出会いがあってこそといえます。出会いが何かのご縁ですねといえる側面がある。支援者も利用者とも出会うこ



とで学び、自らを磨く。そうした相互作用が人生を舞台に存在するからこそ、やりがいがあります。

そんなことを志向し、一生をかけて仕事にして、生きていく。それが福祉の仕事に就いている喜びでしょう。

場やモノも役割を機能させる

先ほど、内在化されたいろんな「〇〇すべき」（超自我）を持ちながら人は生きているのではないかという話がありました。

この超自我、自我、原始的自我を用いた心の構造は、心の中を説明するだけではないのではないかという意見を持つ人が出てきます。フロイトの弟子たちによって様々な解釈や発展を遂げていき

ます。その中に集団の場面にこれら3つの働き（超自我、自我、原始的自我）を置き換えて考えることもできるのでは…と考える説も出てきました。

人が複数いる場面の中に「超自我」的機能を含んでいる人々がいることもあるのではないかという考え方です。学校のクラスで言うなら、まじめなグループの人です。時にはそれが利用者さんと今一緒にいる「支援者」ということもある。それが福祉の支援場面かもしれません。

こうして様々なメカニズムを考えてくると、支援の場は、支援者と利用者さん、利用者さんと利用者さんが相互に影響もしあっています。

自分を使って生きていく

時に「仕事を持つことが一番の犯罪抑制」ともいわれます。役割があること、それが他者に認められていることは（反社会的な）行動の抑止にもなります。

また、社会全体に広く目を向けると超自我的に機能している存在はたくさんあります。学問も、職能団体も、政党も、国民性も、県民性も、出生順も、職業も…。●●だからこうあるべき。そして、それが人の行動を規定している。

こうして多岐にわたる社会の構成要素の中で、超自我的な機能、原始的自我的機能、自我的機能を考えると非常に興味深い。そういった相互作用の中で人は生きている。そして支援者としては、利用者の方と出会うときに、自分がどう作用するかを考えておくことがとても大切になります。

以上、私流です。しかし、こう考えることでとても役に立ってきました。

BACK ISSUES

「障害者福祉援助論 1～4」

対人援助学マガジン 43～現在

2020年12月～現在

- 1 福祉の独自性とは？
- 2 違反は健康的なのか？
- 3 あたたかさの伝え方
- 4 リスクとジリツ

「援助職の未来 1～2」

対人援助学マガジン 41～42号

2020年6月～2020年9月

「対談企画 教育と福祉の連携を模索する」

対人援助学マガジン 16号

2014年3月

「障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会」

対人援助学マガジン 6号

2011年9月

「1 工程@1円～知的障害者の労働現場 1～40」

対人援助学マガジン 1号～40号

2010年6月～2020年3月